

重い皮膚病で視力障害

特定遺伝子型 発症しやすく

府立医大など解明

生命にかかわる重い皮膚病のステイブンス・ジョンソン症候群(SJS)や中毒性表皮壊死症(TEN)で重度の視力障害を起す患者は、免疫に関する二つの遺伝子が特定の型であること

園千恵講師、上田真由美講師ら。SJSとTENの多くは薬剤の副作用が原因とみられ、国内で年間約300人が発症し、うち約7割で視力障害や失明に至る。皮膚の損傷面積でSJSより重症な場合にTENとされる。グループは、SJSとTENで視力障害になった患者110人の遺伝子を解析、免疫関連の遺伝子HLAとT

LR3で、両方が特定の型だと約50倍発症しやすかった。該当者は全人口の0.6%とみられる。木下教授は「SJSとTENは診断が難しいが、遺伝子解析によって早期に正確な診断を下すことや、発症しやすい体質を知ることができると話している。」

(松尾浩道)

とが多いことを京都府立医科大や東京大の研究グループが突きとめた。早期診断に役立つ成果で、米科学誌「プロスワン」で18日発表する。研究グループは府立医大の木下茂教授、外